

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2022

課題番号：18H05715・19K20912

研究課題名（和文）海外に長期滞在する日本人家庭の心理社会的適応

研究課題名（英文）Psychosocial Adaptation among Japanese Sojourners Living Abroad

研究代表者

安藤 幸（Ando, Sachi）

京都大学・教育学研究科・講師

研究者番号：60820347

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究により、長期滞在家庭・者は、帰国後の生活を展望しながら、滞在先社会での生活を営むことにより、心理社会的適応を行っていることがわかった。長期滞在は、一時的に祖国を離れることであるが、その期間後には元の場所にすんなりと戻ることが望まれているため、滞在先社会においても日本での生活を再構築することが優先されようである。そのため、高度な専門性をもつ長期滞在過程・者は、帰国時には海外での役割や経験を失う「ロスト体験」と、社会の構成員から受け入れられない「リジェクト体験」を通して、心理社会的適応の困難さに直面することがある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

50年後の日本社会は、約1割が外国ルーツの人々になることが予測されている。地域には、多様な背景を持つ人々が暮らすようになる。今後、地域における共生社会構築に向けた取組みの検討を進めていく必要がある。日本社会に流入・定着する移民や長期滞在家庭・者を考えるためには、海外に滞在する日本人がどのように心理社会的適応の過程をたどるかをまず理解することが有効である。本研究で示唆された長期滞在家庭・者がもつ多様な視点や経験は、今後の多様化する日本社会を考えるうえでも有効である。

研究成果の概要（英文）：This study shows that expatriate families/individuals are more likely to experience psychosocial adaptation by living in the host society while preparing life after returning home. Long-term stays mean temporarily leaving one's home country, hoping that the expatriates would return to their original place smoothly after the sojourn. Thus, they seem to prioritize restructuring their lives in the host society as if they were in Japan. The expatriates with advanced expertise tend to experience extra challenges in psychosocial adaptation through losing their roles and experiences that they had overseas, as well as being rejected by members of the society, when returning to their home country.

研究分野：社会福祉

キーワード：海外長期滞在 心理社会的適応 地域共生社会 地域福祉

## 1. 研究開始当初の背景

海外に在留する日本人の数は年々増加している。その多くは民間企業関係者とその同居家族で、いずれ日本に帰る予定の長期滞在家庭である。長期滞在者が永住者よりも多いことは、日本人の国際移動の特徴といえる。

これまでの移民研究は、祖国に戻る予定のない永住者個人がどのように移住先社会に溶け込むかという観点から、主に受け入れる側の視点で理論が展開されており、長期滞在家庭がどのように滞在先社会と折り合いをつけているかという議論は限定的であった。

これまで慣れ親しんだ祖国から移住先社会への移動には心理社会的な混乱を伴うとされ、国際的に移動する移民は祖国の客観的な見詰め直しと移住先社会への適応を経験することになる。国際移動に伴う祖国の客体化は移民特有の経験であり、移住後時間をかけて移住先社会が新たな「ホーム」へと変容すると考えられる。移民の移住先社会での心理的および社会的機能を心理社会的適応という。

ある一定期間の海外滞在先日本に戻る長期滞在者は、永住者とは異なる心理社会的適応を示すようであるが、いずれの国際移動においても一時的であれホームを見失う「精神的なホームレス状態 (spiritual homelessness)」を経験するようである。永住者は、移住先社会に順応する努力をする一方で、長期滞在者は祖国とのつながりをより積極的に維持しようとする。また、子どもがいる長期滞在先家庭は、単身者や永住家庭とは異なるネットワークを活用し、いずれ日本に戻ることを前提に、滞在先社会と関わり合いながら生活していると考えられる。

長期滞在先家庭は、一時的に滞在先社会に暮らしながら、祖国とのつながりを維持するという二次元的な生活をしていると考えられる。永住者とは異なり、長期滞在先家庭は滞在先社会に完全に溶け込む必要はないと思われ、帰国後の生活を念頭においた生活を送っていると考えられる。そうであるとすれば、いずれ本国に帰国する長期滞在先家庭・者にとって、滞在先社会への心理社会的適応のあり方とはどのようなものであろうか。異文化間を行き来する長期滞在先家庭が異文化体験を内在化させる過程では、どのような葛藤や気づきがあるのだろうか。そうした葛藤や気づきは、グローバル化時代に生きる私たちに、どのような示唆を与えてくれるのだろうか。本課題では、これらの問いに向き合うこととした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、長期滞在先家庭の滞在先社会への心理社会的適応のあり方を明らかにすることであった。

## 3. 研究の方法

長期滞在先家庭が滞在先社会との摩擦をどのように克服し、帰国後の日本社会での再受容に向けた準備をどのように行うのか、また、長期滞在先家庭の子どもが通う在外教育施設がどのような役割を果たしているか、インタビュー調査を行うこととした。

まず、日本国内の学校と同等の教育を行う全日制の日本人学校として世界最大規模である東南アジアの在外教育施設を調査地とし、現地の長期滞在先家庭・者を調査の対象とした。協力者から生の情報を効率よく網羅的に得るため、関係者ネットワークやスノーボール・サンプリングを活用した。また、現地で日本人が集まる地域の観察や、日本人の組織の関係者からも意見を聴取した。

また、新型コロナウイルス感染症の世界的なまん延により、海外での調査が困難になったため、日本に帰国した元長期滞在先家庭・者も対象に広げて調査をすることになった。海外、特に北米において専門性を持ち、長期的に活動をした後に日本に帰国した者を対象に、インタビューおよびグループ・インタビューを行った。これらの協力者は、医療・看護・福祉関係、プロスポーツ関係、芸術関係において高度な専門性を持つ者であり、現地に永住することも視野に入れて生活していた者が多く含まれている。

## 4. 研究成果

### (1) 新たな知見

長期滞在先家庭・者は、同じ境遇にいる日本人や、配偶者が勤務する会社または子どもが通う日本人学校のネットワークを主な情報源としていることがわかった。滞在先社会が非英語圏の場合は特に、現地の言葉や社会に馴染むことよりも、子どもが通う日本人学校や習い事を通して、現地においても日本の生活を再現することを優先しているようであった。また、中学校までは滞在先社会の日本人学校に子どもを通わせているが、高校進学タイミングで母親と子どもだけが日本に帰国する選択をする長期滞在先家庭も多くあった。一方で、長期滞在先家庭・者は、語学学習や地域のボランティア活動を通して、滞在先社会とのつながりを築きつつ、それらの活動を日本帰国後のキャリアにつなげようとする者もいた。長期滞在先家庭・者は、海外滞在中も日本とのつながりを維持し、今後の日本での生活をイメージしながら、いずれ帰国するときに備えて行動しているようであった。

すでに帰国した日本人は、特に何らかの専門性を持っている場合、滞在先社会では享受していた専門性を生かした役割や活躍の機会を、日本社会では保留または放棄せざるをえない状況にあった。海外で培った専門性を生かして、日本社会に貢献することを期待して帰国しながら、その専門性が日本においても生かされることは稀のようであった。これは、海外で習得・研鑽した専門性が、制度などの違いから日本社会においては必ずしもうまく移行させることができない難しさゆえである。同時に、社会の構成員からは、自らの海外での知識や経験を快く受け入れられていないと感じるものも多々あった。これらのことが、専門性を持つ日本人の帰国後の心理社会的適応を難しくしているようであった。つまり、社会や人間関係の摩擦を避けるために、自らの経験を謙遜し、高度な専門性を発揮できないまま、新たな役割や活躍の機会を模索している者が少なからずいた。

長期滞在家庭・者の心理社会的適応は、帰国後の生活を展望しながら、滞在先での生活を営む必要があることがわかった。長期滞在は、一時的に祖国を離れることであるが、その期間後には元の場所にすんなりと戻ることが望まれているようである。そのため、長期滞在家庭・者は、滞在先社会においても、日本での生活を再構築しようと努めるようであった。プラスアルファの経験や専門性を持って帰国することは、あまり期待されていないようである。そのため、高度な専門性を持つ長期滞在家庭・者は、海外での役割や経験を失う「ロスト体験」と、帰国後には社会の構成員から受け入れられない「リジェクト体験」を通して、心理社会的適応の困難さに直面することが明らかになった。

## (2) 今後の展望

50年後の日本社会は、約1割が外国ルーツの人々になることが予測されている。また、新型コロナウイルス感染症のまん延のような、世界中の人々に影響を与える出来事は、生活のあり方や心の持ち方、人との関わり方を変えてしまう。地域における共生社会構築に向けた取組みは、今後ますます進められていく必要があり、その際には多様な経験や価値、技術を持つ人々が意見や考えを出し合える環境を作る必要がある。本研究で示された長期滞在家庭・者が持つ多様な視点や経験は有効である。

## (3) 主な成果

### ・学会発表

2018年の日本移民学会の「海外に長期滞在する日本人家庭にとっての適応」についての発表では、まず、永住者とは異なる移住のあり方としての「長期滞在者」について紹介した。そのうえで、長期滞在者の心理的・社会的適応のあり方について、先行研究のレビューと、バンコクの長期滞在家庭・者の調査から、永住者とは異なる適応モデルの検討が必要であるとした。「日本を再現する志向性」や、帰国後の「ステップアップ」を見据えた生活について説明した。さらに、現地社会との相互作用の質と量については、長期滞在家庭・者は、きわめて限定的であることを紹介した。

2019年のAAS-in-Asia学会の「Japanese sojourners living abroad: How are they faring?」の発表では、まず、日本人長期滞在者についての定義や動向について紹介し、そのうえで日本人長期滞在者が海外滞在中に経験する心理社会的適応について説明した。また、その過程を促進または阻害する要因を検討した。

2019年のドルトムント工科大学心理・社会・教育学部との国際交流・研究会では、「Japanese families living abroad: Maintenance of Japanese-ness in a host society」の発表を行った。日本人長期滞在家庭・者が、現地社会において、努めて「日本らしさ、日本人らしさ(Japanese-ness)」を維持する傾向にあることについて、これまでの調査結果を紹介した。同研究会では、教育や社会、心理場面における「日本らしさ、日本人らしさ(Japanese-ness)」の表出などについて、諸学問領域からの検討が行われており、当発表では、社会福祉の視点から日本人長期滞在家庭・者の、移住先社会における「日本らしい、日本人らしい」適応戦略について、参加者とともに議論するきっかけとなった。

2019年の京都大学における研究会では、「国際移住、適応、そして定住：日系アメリカ人を例に」の発表を行った。アメリカの日本人および日系人移住者(長期滞在者、永住者、日系アメリカ人)を例に、国際移住、心理社会的適応、さらには定住について検討し、参加者とともに議論を行った。

### ・論文

「University teaching and learning in a time of social distancing: A sociocultural perspective」を執筆した。本稿では、コロナ禍における大学院生の「心理社会的適応」に着目した。非常時における適応家庭は、海外の長期滞在家庭・者のそれとも関連するものである。

### ・今後の予定

新型コロナウイルス感染症のまん延により、海外での調査や国内外の学会発表はほとんど不可能になった。また、想定外の事態に対応するため、オンラインやハイブリッドの教育活動などに時間を取られることになり、当初予定していた通りには調査が進められなかった。それでも、できる限りで活動を行った。

さまざまな取組みとその結果については、今後国内外の学会や研究会での発表を行うとともに、査読中の論文も含め、引き続き論文にまとめていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Ando Sachi	4. 巻 31
2. 論文標題 University teaching and learning in a time of social distancing: A sociocultural perspective	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Human Behavior in the Social Environment	6. 最初と最後の頁 435 ~ 448
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/10911359.2020.1814928	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 安藤幸
2. 発表標題 Japanese sojourners living abroad: How are they faring?
3. 学会等名 AAS-in-Asia 2019 Annual Conference (Bangkok, Thailand) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安藤幸
2. 発表標題 海外に長期滞在する日本人家庭にとっての適応とは
3. 学会等名 日本移民学会第3回冬季研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ando, Sachi
2. 発表標題 Japanese families living abroad: Maintenance of Japanese-ness in a host society
3. 学会等名 The 2nd Education Workshop (TU Dortmund University and Kyoto University)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安藤幸
2. 発表標題 国際移住、適応、そして定住：日系アメリカ人を例に
3. 学会等名 京都大学職員組合教育学部支部主催
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------